論　文

モダンツーリズムのまなざしとレジャー空間の生産

根橋　正一

はじめに

18世紀から19世紀後期までに生まれた社会科学，とくに社会学の研究は，ヨーロッパにおける近代社会の形勢とその特徴について研究するばかりで非ヨーロッパの研究に立ち向かうことは少なかった。そのヨーロッパ世界は16・17世紀以来非ヨーロッパ世界―アフリカ・南北アメリカ・アジアといった諸地域との接触，侵略，支配，交易といった関係を樹立し，それらとの係わりなしに存在などありえようはずも無かったにもかかわらず非ヨーロッパ世界に関心を持つことはまれであったのである。当時のヨーロッパ世界は，それらの地域からの恩恵を受けて豊な生活を享受していたにもかかわらず，植民地主義や奴隷制度，アヘン輸出について研究することもなく，ヨーロッパ内部の研究を集中していたのである。それはヨーロッパの社会学がヨーロッパを第一と見ていたからである。最先端の技術開発力を持ち，科学技術を応用した機器文明を持つ強力な地域であり，それを導いた啓蒙主義，合理主義，商業主義，産業主義を創出し人類のリーダーとして地球世界に君臨することになったことを明白な人類のあるべき歴史と見ていた。そのなかで，このような人類史的な歩みがヨーロッパにのみ成立したのはなぜかという問題を掲げて社会学理論がうち建てられていった。ヨーロッパの歴史が人類史の最先端にたどりついたとして，他の国や地域の社会や歴史を研究し，人類史を総括する理論を創出した。そして，ヨーロッパ近代を頂点とする世界観は，非ヨーロッパを近代に向かって歩む途上社会として位置づけ指導的な役割を自らの使命としたのである。社会学研究は，「産業社会という概念は，奴隷制や他の不自由労働を近代性の中心問題の考察から除去した。新たな世界におけるそのような労働と，当時のヨーロッパの帝国主義

とはつながりがあるにもかかわらず，理論的省察はヨーロッパにおいて顕著に見られた社会秩序問題の内部へと向けられた[1)]」のであった。その結果，社会学の提起したモデルは「せいぜいのところ十数の北大西洋環帯の諸社会（日本を含む）にしか当てはまらなかった」のであり，この「北大西洋環帯の諸社会は植民地大国だったのであり，国境を越えた経済的，軍事的，社会的，文化的関係はきわめて重要なものであった[2)]」。

マックス・ヴェーバーは，ヨーロッパにおいてのみ近代合理主義的な資本主義が誕生したのはいかなる事情があったからか？という問題を設定し，支配・権力の社会学，都市の類型論，近代的経営の仕組みの研究，さらに音楽の研究までも手がけ近代合理性がヨーロッパに誕生した事情を記述しようとした。なかでも，プロテスタンティズムの発生こそが近代合理主義的な資本主義を生み出すことに加担したのであり，プロテスタンティズムの特徴である現世的な禁欲倫理の傾向が資本主義の精神の誕生に係わったとしたのである。その記述の過程で，非ヨーロッパの種々の宗教が近代合理性を生み出すことが無かったことを示すことにもなった。宗教の国際比較研究は宗教社会学という領域をうち開く記念碑的業績となった。しかし，この比較はヨーロッパ至上主義を援護する視点になりえても，非ヨーロッパ世界を描き出すことも理解することもなく，ましてやヨーロッパと非ヨーロッパとの関係を論ずる可能性をもつことはなかった。ヨーロッパの近代資本主義がいつか「鉄の檻」に行き着くだろうという予見は大きな発見であり近代社会への警鐘となったが，植民地支配のもとにある非ヨーロッパの社会の問題に対しては無関係であった。「ヴェーバーにとっての最大の関心事は，近代西洋を特徴づける〈固有かつ特有の合理主義〉の本質を確定することであり，他の文明においてはそういった特徴が欠如していることを説明することにあった[3)]」のである。

カール・マルクスの史的唯物論も疎外論もまた，非ヨーロッパ世界の被支配的，非植民地的社会やその住民たち，奴隷的な労働を強制される人びとにたいする顧慮は無かったのではないか。マルクスもまたヨーロッパ中心主義の枠内にあったのである。アジア的生産様式の段階にとどまった世界は，合理性が支配する歴史の頂点に達することのない世界であり，途上社会ですらなかった。そこの人びとは，科学技術にもとづいた近代的な生産関係のなかで搾取される存在として描くことで事足れりとするのだろうか。革命の理論は都市における賃金労働者を主体とするもので，近代化せず賃労働も不完全に

1）Gurminder K. Bhambra, 2007, *Rethinking Modernity: postcolonialism and the Sociological Imagination*, Macmillan Publishers Limited,＝金友子訳，2013年，『社会学的想像力の再検討―連なりあう歴史記述のために―』岩波書店，70ページ

2）John Urry, 2000, *Sociology Beyond Societies: Mobilities for the twenty-first century*, Routlege,＝吉原直樹監訳，2006年，『社会を超える社会学―移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版会，20ページ

3）バンブラ，前掲書，82ページ

しか存在しえていない植民地的強制労働者，非ヨーロッパの非近代にある人びととは無縁であった。マルクス主義者たちが人類の解放の理論へと発展していくのは，その後の周辺や植民地の出身者たちの独立・解放運動や研究によらねばならなかった。

19世紀マルクス主義やヨーロッパ社会諸科学，社会学は植民地主義や奴隷制，アヘン貿易などアジア諸地域におけるヨーロッパ列強の暴力的野蛮を俎上に上げることはなかった。ヨーロッパがなぜこのような非道を是として，非ヨーロッパに対峙したかについての研究の必要があるのではないか。啓蒙主義を掲げつつその対極にあるはずの野蛮・暴力を用いることに寛容になりえたのはなぜかを問いたい。われわれは，アジア諸地域におけるモダンツーリズムの形成に関する研究の途上にあり，その文脈のなかで表面には現れない「暴力・野蛮」を問題にすることが求められているのだ。

1章　問題の所在

アジア諸地域におけるモダンツーリズムの発生は，欧米列強の帝国主義的あるいは植民地主義的なアジア進出を背景としている。長期の16世紀に誕生したヨーロッパ世界経済は，ワールドシステムとして非ヨーロッパを巻き込んでいった。特に19世紀以降のイギリスをヘゲモニー国とする帝国主義的な拡大が，ヨーロッパのツーリストを非ヨーロッパ世界へといざなう契機となった。それは，16・17世紀におけるスペインやポルトガル，さらにオランダを中心とする中南米への植民活動，アジア諸地域における重商主義的な帝国主義段階において，ヨーロッパ人ツーリストがこうした地域に出現しなかったのとは対照的である。イギリスの産業的，植民地的な帝国主義は，アジア各地にヨーロッパ人植民者を送り込み，そこに近代的，植民地的な産業を興し，ヨーロッパ人コミュニティー，植民地都市を建設した。そうした植民地空間は，植民者や植民地行政にかかわる人びとにとっては生活空間であり，娯楽・レジャー空間も生産されることになり，非ヨーロッパのエキゾティックな自然景観や現地の人びとの伝統文化や生活は癒しとなったに違いない。

ヨーロッパ本国から，アジア各地の植民地や租界地などヨーロッパ人の力が及ぶ場所にはヨーロッパ人ツーリストのまなざしが向くことになったが，そのまなざしとはどのようなものであったのかについて考察するのが本稿の課題である。

ツーリストのまなざし（tourist gaze）研究を提案したのはジョン・アーリであった[4)]。彼はこの書で，ツーリストのまなざしとしてロマン主義的なまなざし（romantic gaze）

4）John Urry, 1990, *The Tourist Gaze: Leisure and travel in Contemporary Societies*, Sage Publications, ＝加太宏邦訳，1995,『観光のまなざし―現代社会にけるレジャーと旅行』法政大学出版局

と集合的なまなざし（collective gaze）を区分するとともに，他に「本物―まがい物」「現代―歴史」という２つの軸でまなざしを分析することを提案した。また，アーリは第２の著書[5)]のなかで，ポストモダンにおける環境ツーリズムを対象としてツーリストのまなざしの諸形態をシャラートの議論と総合して，「ロマン主語的」，「集合的」に加えて，「見物人的」，「環境的」，「人類学的」なまなざしをあげてそれらの特徴を示している（表１参照）。こうしたアーリの一連の研究は，主としてモダンツーリズムからポストモダンツーリズム，ポストツーリズムへの変遷とポストモダン状況を視野に入れたツーリズム研究であった。

表１　観光のまなざしの諸形態

まなざし			
ロマン主義的	孤独	没入状態の持続	幻視，畏敬，アウラを伴う
集合的	コミュナルな活動	一連の共有された出会い	親しんだものへのまなざし
見物人的	コミュナルな活動	一連の束の間の出会い	さまざまな記号の一瞥，蒐集
環境的	集合的組織	持続的で啓蒙的	調査と点検のための精査
人類学的	孤独	没入状態の持続	精査と能動的解釈

出典）John Urry, 1995, *Consuming Places*, Routledge, ＝吉原直樹・大澤善信監訳，2003,『場所を消費する』法政大学出版会，318ページ

われわれは，モダンツーリズム，とくにヨーロッパ人ツーリストのアジア諸地域へのツーリズムをけん引していたまなざしについての研究枠組みを提案しなくてはならない。19世紀後半から20世紀の70年代に至る期間に帝国主義的，植民地主義的なアジア進出したヨーロッパ諸国，加えてアメリカの人びとが植民地や租界地などとして開かれた近代的な都市や地域をデスティネーションとしたモダンツーリズムにあっては，ヨーロッパに対する非ヨーロッパとしてのアジアへの視点がツーリストのまなざしの基本的な視点となっていたに違いない。ツーリズムは空間的にも時間的にも，さらに文化的にも自らの日常性の境界を越えて外へ出ることを意味するとしたのはアーリであるが，当時のヨーロッパ人ツーリストもまた，自分の日常性から越境する旅としてアジアを目指したのではないだろうか。アジアは，日常を越境した非ヨーロッパであり異文化の地であり，いわばエキゾティックな興味関心の対象であったと考えられる。また，人類史の頂点である近代を達成したヨーロッパ人にとってアジアは，非近代，前近代あるいは外近代（out of modern）であり，自らの日常性とは対極にあるわけで，ノスタルジアの対象でもあったのではないか。すなわち，近代化の歴史の中で喪失した自然や文化への懐かしさに由来するノスタルジアが，アジアへのまなざしの特徴になっていたと考えられるの

5）John Urry, 1995, *Consuming Places*, Routledge, ＝吉原直樹・大澤善信監訳，2003,『場所を消費する』法政大学出版会，318ページ

である。

本稿で課題とする植民地主義，帝国主義を背景とするヨーロッパ人ツーリストのまなざしは，アーリの２類型だけでは理解されないのではないだろうか。それは，近代的・合理的なヨーロッパと非ヨーロッパとの接触から出現したヨーロッパ人ツーリストのまなざしであり，エキゾティックでノスタルジックなまなざしであり，オリエンタリズム的な視点が色濃く影響していたのではなかったか。こうした視点は，17世紀から18世紀にかけて成立した，ヨーロッパ世界経済の成立に伴う最初のモダンツーリズムであるグランドツアーにおいても見られるものであった。ヨーロッパ世界経済はイタリアやイベリア半島のポルトガル，スペインを中心とする，いわば南欧で誕生したが，17世紀その中心は北上してイギリス東南部，フランス北部，フランドルやネーデルラントの発展が著しくなった。他方それまで中心であったイタリアやイベリア半島諸国は半辺境へと後退したのであった。この時期に台頭してきたイギリスの貴族や専門職の子弟たちが，グランドツアーと称してイタリアへの教育旅行に出かけたのであった。グランドツアーを導いたまなざしは，ノスタルジックでオリエンタリズム的であった。アジアに向けられたヨーロッパ人のまなざしも，それと共通している点があったと考えられる。他方，グランドツアーの時代のイタリアへのまなざしと植民地帝国主義を背景としたアジアへのまなざしとの間には大きな隔たりがあるのも当然である。グランドツアーに出かけた次代を担う若きエリートたちは，ヨーロッパ文明の故地，自らのルーツを求めてイタリアを訪ね，古代ギリシア・ローマの遺跡や文物，物語の現場を見学したり，ルネサンスの芸術を見聞し，アカデミーで講義を受け，美術工房で美術家と交流し肖像画を描いてもらったりした。また，にぎやかな祝祭の日々を体験し，演劇やオペラを鑑賞する旅行でもあった。

19世紀のアジア各地を訪れたヨーロッパ人ツーリストのまなざしは，前近代的で合理性もなく啓蒙されていない非文明的な人びとが住む非ヨーロッパ世界に向けられたそれであり，遅れたものへの教育，指導，それゆえ支配を必要とすると考えるオリエンタリズム，植民地的支配を妥当とする考えを背景としたものであった。ヨーロッパによってアジアに向けられるツーリストのまなざしを考察するには，この点を明確にしつつ進めなければならない。本研究では，ノスタルジアとオリエンタリズムを手がかりにする。帝国主義，植民地主義は欧米の非欧米に対する暴力的で野蛮な支配，搾取を是とする思想であるが，ノスタルジアについてもそうした暴力性や支配とのかかわりの視点を逃してはならない。「帝国主義的ノスタルジア」という概念を提起するカレン・カプランの研究[6)]は参考になる。次章では，カプランの議論に着目するとともに，ザイードのオリ

6）Caren Kaplan, 1996, *Questions of Travel: Postmodern Discourses of Displacement*, Uuke University Press,＝村山敦彦訳，2003,『移動の時代―旅からディアスポラへ』未来社

エンタリズム論に見えるヨーロッパの非ヨーロッパに対する暴力性を含んだまなざしについて考察する。

2章　モダンツーリズムのまなざし

植民地帝国主義時代の欧米人のアジアにむけたツーリストのまなざしとして，ノスタルジアおよびオリエンタリズムに注目してみていく。

1．帝国主義的ノスタルジア

ノスタルジアは，17世紀スイスの軍人たちが，軍に従って遠く戦地に赴き，そこで感じた故郷への思いであり，ホームシックから近代的な心情として認識されるようになった感情である[7)]。心理学の対象となったメランコリーとも共通する心情であり，ヨーロッパで貴族や都市人の間に蔓延したことはよく知られている。いまではすでに無くなってしまったもの，過去の良き思い出となるものに対する郷愁の念である。ノスタルジアやメランコリーが近代のツーリズムやレジャーの動機になったことは先行研究が明らかにしている。例えば，アラン・コルバンの『海辺の誕生』[8)]は，18世紀パリの貴族の間にあった豊かな都市的な生活を享受しながらメランコリーが，海水浴への動機の一つとなっていったことを明らかにしている。都市的な生活のなかで失われた健康，溌剌とした生気あふれる自然の中でのような健やかな生活が失われたのである。そんな喪失感はメランコリアとして蔓延した。対照的に海辺の人びとの陽に焼けた健康的な身体，細事にとらわれることのない活動的で活力にあふれる日々の生活が存在する浜辺へ都市貴族たちを誘っていったのである。海水浴が健康によいと主張する医師たちの登場によって海辺へのあこがれは加速化することになる。都市の生活のなかで失われたものを取り戻そうとするノスタルジックな心情が，海水浴やレジャーの入り口にあったのである。

また，ジャン・ジャック・ルソーの「自然に帰れ」という提唱もまた，人びとの山や自然の中での活動を促すことになった。ルソーは『エミール』[9)]で子供の教育が知識偏重になっていく中で，失われていく自然の力・野生の力を取り込んで本来の子供の力を育成する方法を提案したのであった。近代的教育の流布とともに失われていく自然の力，

7）Fred Davis, 1979, *Yearning for Yesterday: A Sociology of Nostalgia*, The Free Press＝間場寿一・荻野美穂・細辻恵子訳，1990年，『ノスタルジアの社会学』世界思想社

8）Alain Corban, 1988, *Le Territoire Du Vide: L'Occident et le desir du ravage (1750-1840)*, Editions Aubier-Montaigne＝コルバン『浜辺の誕生』

9）J. J. Rousseau, *Emile, De L'education*, ＝今野一雄訳，1962年，『エミール』岩波書店（岩波文庫）

その自然な力を持つ子供の育成の提唱は，ノスタルジックな「自然に帰れ」という命題となったといえよう。これに応じるように，多くの人びとがピクニックやハイキング，自然の中での滞在，キャンプや別荘で体験することになった。アーリが述べたロマン的まなざしが多くの美しい自然景観に向けられるきっかけになった。

ノスタルジアは誰にもある人びとの心情として共有されレジャーやツーリズムの動機としても重要な地位を占めることになった。カレン・カプランは，ノスタルジアは２種類に分類できるという[10)]。すなわち，単純なノスタルジアと帝国主義的ノスタルジアである。無邪気な懐かしみや子供の頃への郷愁に対して帝国主義的ノスタルジアは暴力性を隠し持つもので，それとの関係を考慮に入れて認識すべきノスタルジアである。ここでは，帝国主義的ノスタルジアとツーリズムやレジャー，とくに植民地ツーリズムとの関係に注目することにしよう。

帝国主義的ノスタルジアは，破壊したものへのノスタルジアであり，自分の過去を破壊してその代替物が残る遅れた地域にノスタルジアの対象を見出す。ツーリストのまなざしとして，植民地などアジア各地に対する帝国主義的まなざしはヨーロッパの非ヨーロッパに対する視角であると考えられる。近代ヨーロッパにとって非ヨーロッパは，非近代であり異文化，異国である。すなわち，近代化したヨーロッパにとって近代化の過程で失ったものへのノスタルジアの向かう対象が，近代化の過程で失ったものあるいは自ら破壊することを決定し抹消してきたものであり，それはまだ近代化の歩みが始まっていないあるいは歩み始めたばかりのアジア諸地域に残存している可能性がある。手付かずの自然，伝統的な文化や生活などがそれであり，ツーリストのまなざしの対象となるのである。

植民地主義は，帝国主義が武力もしくは経済力，科学力を用いて争い，自然・文化・社会を破壊し，近代的なヨーロッパ社会を建設し人びとを教え導くという使命に根ざしていた。近代化のプロセス，戦いの過程で暴力的にあるいは経済的に破壊されたものに対するノスタルジアが暴力で勝ち取った空間に向かう視点となる。

２．オリエンタリズム，エキゾティズム

17～18世紀のオリエンタリズムの主要な担い手はイギリス，フランスであり，19世紀後期から20世紀にはアメリカが主要な担い手となった[11)]。当時の欧米の人びとがもっていたツーリズムにかかわるオリエンタリズム的な発想の業績についてザイードはその著の「４章　巡礼と巡礼者」で論じている。オリエントに旅するヨーロッパ人のオリエン

10）カプラン，前掲書，

11）Edward W. Said, 1978, *Orientalism*, Georges Borchardt Inc.,＝板垣雄三・杉田英明・監修，今沢紀子訳，1986，『オリエンタリズム』平凡社

トに対するまなざしについて述べている。ザイードに従って整理する。

当時イギリスは地中海世界からスエズ運河を越えてアラビア海，インド洋さらにアジア諸地域に至る広大な領土を持つ世界帝国を築いていた。中でもインドはイギリス人にとって大きな意味を持っていた。こうした帝国を旅することはイギリス人にとっては彼らの領土を経巡る旅であり，いわば自らの力を確認しながら巡る巡礼であった。これとは対照的に，フランス人にとっては，欠損部分のある自らの領域，かつて自分のものであった領土にしていたにもかかわらずイギリスとの争いのなかで失った国々を通過しつつ自らの帝国の地を目指す，いわば到着地のある旅であった。とくにエジプトや中近東の地は，ナポレオン時代に勢力を伸ばし，支配し，君臨したヨーロッパ人としてフランス人として誇りの地であったが，後にその支配権は失われ，すっかり様相の変わった異国のオリエンタルの地になっていた。失われた領土であり，それゆえにノスタルジックな気分をもたらす地であった。

オリエンタリズムは，ヨーロッパによるオリエントの支配を当然としていた。オリエントの「文明，宗教，習俗たるやまことに低俗にして野蛮かつ対立項的なものであって，それゆえヨーロッパにおける再征服は当然のことといわなければならない[12)]」。ヨーロッパは，オリエントに自由の意味を教え諭さなければならない。自由について彼らは知るところがない。礼儀というものを彼らはまったくわきまえていない。力こそが彼らの神なのだ。しかるに，東洋人は征服されることを必要としている。西洋人によるオリエント征服が征服ではなく解放なのだとする論理に何の矛盾も感じていない[13)]のであった。

こうした論理は，旅するオリエンタリストにとってのオリエントへの巡礼とは，「単に帝国的尊大の意識がオリエントに浸透してゆくということだけでなく，むしろオリエントをいわば大陸ごと没個性的に支配することができる高みにまで昇った結果として，そのような意識を除去してしまうこと」であった。こうして「オリエントのなまなましい現実のアイデンティティは萎えしぼんだ[14)]」のであった。

オリエンタリストにとっての旅への動機としては，科学的な現実よりもエキゾティックでかつとりわけ魅力的な現実を探し求めるものであった[15)]。その他の動機もあった。すなわち，第一にオリエントとその地の記念碑を訪れることによって，彼自身の研究を完成させなければならなかった。第二に自己を完成させる，第三に宗教的精神の重要性を確認するという動機もあった。さらに，これがとりわけ重要なのだが，「かくあるべ

12）同上書，176ページ
13）同上書，176～177ページ
14）同上書，183～184ページ
15）同上書，174ページ

し」と仮定したとおりに見ることの必要性である[16]。オリエンタリストの旅は，自分にかかわった知識，見方の妥当性を確認するためのものであり，その視点，まなざしの基礎は「自己を全ヨーロッパと同一視する超個人的自我（エゴ）[17]」を主体とするものであった。すなわち，「彼が俯瞰しているのは，やがてばらばらに分割されてヨーロッパの宗主権のもとに接収され，その不可侵の領土となるはずの解体過程にあるオリエント[18]」であり，そのヨーロッパ人としての旅のまなざしであった。

ヨーロッパのオリエンタリストにとってオリエントとは，「既視（デジャヴー）の場所であり，現実の旅行を完遂したあとも，彼らが何度も立ち戻っていくべき場所[19]」である。オリエントは，「豊饒さのみならず，性的な期待と（と威嚇），倦むことなき官能性，あくことなき欲望，底知れぬ生殖のエネルギーを示唆している[20]」ように見えていた。それは，ブルジョア階級の日常生活のなかで，彼らの持たざるものへの憧れであったのであり，エキゾティックなものへの欲望であった。「彼らが欲しているものがオリエント的な決まり文句，すなわちハレム，王女様，奴隷，ヴェール，踊り子の少年と少女，シャーベット，膏薬等々の中に閉じ込められた[21]」ものへの憧れと欲望がオリエントへの旅の動機となっているのである。「オリエントはヨーロッパにおいてもらえない性的体験を捜し求めることができる場所なのであった[22]」。ヨーロッパにおけるブルジョア的な性道徳や家族制度の普及に伴って，その過程で失われ姿を消した性的な習慣や文化に対するノスタルジアでもあった。

オリエントは愚鈍で嘘つき，野蛮であるからヨーロッパによって支配されなければならない。西洋にはオリエントを導く崇高な使命がある。使命のために行使される暴力は完全に正しく合理的なものである。国民国家を形成したヨーロッパは暴力を国家権力に一元化した平和国家であり，暴力から自由になった社会や市民は野蛮・暴力とは無関係であり，オリエントに対する支配においても使命である合理的な任務を実行することができたし，国家的暴力を背景にしていることも無視することができた。そうした「オリエンタリズム」には，ヨーロッパ人自らの暴力性・野蛮への反省が存在することはない。また，オリエントをオリエント化することによって，その視野の中心に存在するヨーロッパ人は自らを反省する必要はなかったからである。辺境であるオリエントだけをあげつらうことだけで事足りるのであった。

16）同上書，175～176ページ
17）同上書，183ページ
18）同上書，183ページ
19）同上書，185ページ
20）同上書，193ページ
21）同上書，195ページ
22）同上書，195ページ

ヨーロッパ人ツーリストもまた，国際法的に正しい行動をとっていれば，合法的であるように見せかけることで，自らの暴力性を隠蔽し，無邪気に旅を楽しむことができた。暴力を独占する国家による暴力は正当なのであり，それによって守られる社会や市民は暴力から自由な存在であった。

3章　まなざしの背景としてのヨーロッパ近代の暴力性

前章ではアジアに旅するヨーロッパ人ツーリストのまなざしをノスタルジアとオリエンタリズムという視点から見てきたが，それらは植民地主義・帝国主義の暴力性・野蛮性から自由であった。欧米人のアジア諸地域における経済活動やレジャー活動は合理的・啓蒙的で平和的なものであるというイメージをまき散らしていたのである。本章では，ヨーロッパ近代の合理的・啓蒙的な原理や社会に隠れている暴力性・野蛮性に注目して，それらがいかに処理されてきたのかについて考察する。ホルクハイマーとアドルノの啓蒙と野蛮についての議論，ニーチェの道徳に関する研究および暴力を一手に引き受けることになった国家についての議論を検討する。

1．啓蒙と野蛮

啓蒙や理性に基づいて暴力や野蛮を平和なものに置き換えたはずのヨーロッパ近代においてなぜ暴力的な全体主義・ファシズムが発生したのかという問題を掲げて一連の研究を行ったのがフランクフルト学派の研究者たちであった。ここでは，そのうちマックス・ホルクハイマーとセオドア・アドルノ著『啓蒙の弁証法』[23]に注目してわれわれの問題について若干考察する。彼らは，理性がファシズムという野蛮を生み出すメカニズムとして次のように述べている。

理性とは，特殊なものを一般的なものから導き出す能力であり，計画と計算の道具である。道具であるがゆえに，目的に対しては中立であり，目的を欠いていてあらゆる目的に結びつく合目的性（目的合理性）になっていく。そこで，国民たちを操縦することを目的とする全体主義国家は，住民を管理し支配するために理性を利用することが可能になる。他方，理性・啓蒙の主体である市民たちは合理的な方法による支配を容易に受け入れることが可能になる。全体主義に抵抗する原理は理性の中には存在せず，ただ情念に存在するだけになる。しかし，理性と対極にある情念は，まったく自然と同一視され，抵抗力にはなりえない。すなわち，啓蒙が対立しそれから人間を解放しなければな

23）Max Horkheimer and Theodor W. Adorno, 1847, *Dialektik der Aufklarung: Philosophische Fragmente*, Querido verlag, Amsterdam,＝徳永恂訳，1990年，『啓蒙の弁証法―哲学的談想―』岩波書店，127～139ページ

らないとする対象は神話であるが，その神話が認める精神とは自然の中に埋没した精神，自然力としての精神なのである。そうした精神は神々あるいはデーモンに由来する力とみなされ，理性によって否定される対象にすぎないのである。

西欧の啓蒙が一掃しなければならなかった神話は，カトリックの秩序論であり，その下でなおはびこっている異教的民族宗教であった。それらの神話から人間を解放することが市民的哲学の目標であった。しかし，この解放がはるか先にまで到達してしまい，鎖を解き放たれた商品経済によって理性は実現したのであるが，その過程で同時に理性を滅ぼす原因となる力になったのである。つまり実際はこうである。自己保存の原理は自由経済のうちで，解放されなければならないものであった。だからこそ，エゴイズムのために論じた著作家は，社会というものを破壊的原理，すなわち社会が人間の本質である自己保存の原理を破壊するとして認識した。しかし理性によって固持されてきた自己保存の原理は，破壊的な自然力に他ならなかった。自己保存の原理が，自由経済・商品経済によって理性を破壊する力として働き，理性の名のもとに理性を滅ぼしたのであった。

こうしてヨーロッパ近代に出現した全体主義・ファシズムは啓蒙・理性から生まれ，市民に対して破壊的な暴力・野蛮として立ち現われたのであった。近代啓蒙がその市民に対する暴力・野蛮を生み出す契機になっていたのだ。

ルサンチマン道徳

次に，ニーチェが明らかにした「ルサンチマン」から生じた道徳とその背景にある暴力性についてみていく。

地上を支配してきた道徳には２種類，すなわち主人道徳と奴隷道徳があった。この二つの道徳は単独で存在することもあったし，両者を媒介しようとする試みもあったし，しばしば二つのものの混淆や相互誤解も見られるし，時としては並存状態に現れることもあった。主人道徳は，被支配者たちにたいする自己の差別を快感をもって意識する支配者的種族のもとに生じた古代ギリシアの貴族たちのそれが典型である。他方奴隷道徳は，被支配者たちのもとに，奴隷や隷従者らのもとに生じた[24]。

奴隷道徳は，迫害されたもの，圧迫された者，苦悩する者，自由を奪われた者，自己自身に確信のない者，疲労した者等が説く道徳であり，強力者たちの徳にたいして嫌悪をひけらかし，強力者に懐疑と不信を抱いていて，同情を賞讃する。つまり，同情が，慈悲深い手が，温情が，忍耐が，勤勉が，友誼が賞讃される。本質的に功利道徳である[25]。

ヨーロッパの歴史において，主人道徳に取って代わって奴隷道徳が権力を手に入れる

24）フリードリッヒ・ニーチェ，信太正三訳，1993年，『ニーチェ全集Ⅱ　善悪の彼岸・道徳の系譜』筑摩書房（ちくま文芸文庫），30～306ページ

25）同上書，308ページ

ことになったが，いかにそれは誕生し，勝利したか。

奴隷道徳は，ルサンチマン（怨恨）そのものが創造的となり，価値を生み出すようになって生じた。抑圧される者たちは，ルサンチマンをもっぱら想像上の復讐によってだけ埋め合わせた。抑圧する協力者にたいして，また〈外のもの〉・〈他のもの〉・〈自己ならぬもの〉にたいして否（ノン）と言う。この否定こそが創造的な行為であった。彼らが信じ，望むものは復讐への希望，甘美な復讐への陶酔なのではなく，背信の徒にたいする神の勝利，正義の神の勝利である。人生のあらゆる苦悩にたいする慰めを，〈最後の審判〉，彼らの国〈神の国〉の到来と呼び，彼らは〈信仰のうちに〉〈愛のうちに〉〈希望のうちに〉生きることになる。最後の，そして永遠の審判の日，いとも長く古い時代とかくも多くのその所産とが，もろともにみな同じ一つの炎に焼き尽くされるのである。これがルサンチマンから生じた道徳の論理である。つまり，無力であるがゆえに最後の審判の日まで「われわれは悪人とは別なもの，つまり善人になろうではないか。善人とは，暴圧しない者，誰も傷つけない者，攻撃しない者，報復しない者，復讐を神にまかせる者・・・」と言って自らを慰めるのである[26)]。

こうしたルサンチマン道徳が創造される過程で役割を果たした外部に対する否定性および神の力に任せる復讐の論理は，暴力を是認する論理にもなる。「外部に向かって，すなわち自分らと異なるもの・異境に接する段になると，放たれた猛獣とさして選ぶと事がなくなる[27)]」のである。彼らは次々とおこなわれた身の毛もよだつばかりの殺戮・焼き払い・陵辱・拷問などから昂然として泰然自若のさまで引き上げてゆく喜雀躍たる怪物の如く猛獣的良心の無垢へと立ち戻ってゆく[28)]。

ルサンチマン道徳は，外部・異教徒・境界外に対しては残酷な野蛮・暴力的な行為を否定しないのである。ヨーロッパの非ヨーロッパに対する野蛮はルサンチマン道徳のもうひとつの側面であるといえる。

ニーチェは『道徳の系譜』の「〈負い目〉〈良心の疚しさ〉およびその類のことども[29)]」という表題をもつ第二論文で，負い目や良心の疚しさがどのように発生し，人びとはそれをどう処理し，そこから生まれた道徳とはどのようなものであったについて述べている。道徳の基底にある祝祭的な残忍さが明らかにされている。

〈負い目〉は負債に由来している。債権者と債務者との契約関係を創出し，承認した古代人類にとってその約束する人間に記憶を植え付けることが問題となる。債務者はその返済の約束に対する信用を得るために，返済しない場合の代償物として，なおまだ自

26）同上書，道徳の系譜，第一論文，373～419ページ
27）同上書，398ページ
28）同上書，399ページ
29）同上書，道徳の系譜，第二論文，421～482ページ

分の権限に属する他のものを抵当に入れる。抵当物は，例えば自分の肉体，妻，自分の自由や生命，自分の淨福や霊魂の救いさえもあった。返済されなかった場合，債権者は直接的な利益によって損害を埋め合わせる代わりに，一種の快感を返済もしくは賠償として味わうことが許容される。その快感とは，おのれの権力を無力な者の上に遠慮会釈なく振るうことのできる快感，「悪をなす楽しみのために悪をなす」快楽，そして暴行を加えるという享楽である[30]。

こうして加えられた苦悩は何故〈負債〉の補償となるのか？それは，苦悩させることが最高度の快楽をもたらすからである。つまり，苦悩させることは一つの祝祭なのである。こうした残忍というものは，古代人類の祝祭の大きな歓楽であった。さらに，高度文化の歴史を通じても，残忍はいや増す精神化，神聖化された。死刑や拷問，異教徒焚刑といったものなしに至大な規模の王侯の婚儀や民族祭典は考えられようもなかった。苦悩するのを見るのは愉快であり，苦悩させることはさらに愉快である。残忍なくして祝祭はない，刑罰もまた祝祭的なものであった。

〈良心の疚しさ〉の発生の過程

自分自身に向かう残忍性が〈良心の疚しさ〉である。

古い自由の本能に対して国家的組織がおのれを防護するために築いた保塁は，野蛮で放縦，浮浪的な人間の本能をすべて追い退けて，これを人間自身のほうへと向かわせた。すなわち，本能にあった敵意，残忍，迫害や襲撃や変革，破壊の悦び，これらすべてが本能の所有者自身へ方向を転ずることになった。これこそが〈良心の疚しさ〉の起源である[31]。人間が人間たることに，自分自身たることに悩む病気が始まったのだ。

動物としての人間は，他者を苦しめようとする意欲のより自然の捌け口がふさがれたために，自己自身を苦しめようとして良心の疚しさを案出した。良心の疚しさにとりつかれた人間は，その自己呵責を極みまで押し詰めたために，宗教的前提をわがものとした。神に対する負い目（罪責），この思想が人間にとっての拷問具となる。彼は，おのれの固有の動物的本能そのものを神に対する負い目として解釈を変える。かれは自己自身および自己の存在の自然，天真，事実に対して否という。この否定の一切をおのれ自らの外へ投げやり，あえてこれを逆に肯定して神となすのである。神とするばかりでなく，これを神の神聖，神の審判，神の処刑，彼岸，永遠，はてしなき責め苦，地獄，無量の罰および罪責となすのである。そして，自分自身を救われがたいまでに罪のある呪われるべきものと見ようとする人間の意志である。どんな罪を受けても自分の罪を償うことは到底できないと考えようとする人間の意志である。

30）同上書，434ページ

31）同上書，463ページ

人間のうちにある残忍性は隅に押しやられ外に投げ出されたが，消滅したわけでもなく，自らによってあるいは外部化された力（たとえば国民軍）によって他者に対する野蛮や暴力を加えることがある。また，余暇やレジャーはこうした残忍性を満足させる機能をも期待される産業となっていった。

2．暴力の正当化としての国家

近代ヨーロッパは，文明的，啓蒙的，合理的で平和的な社会であり，中世の暴力に満ちて野蛮な時代は過去のことである。そして，「未開に対置され高度の政治経済体制，高い技術・生活水準，魅力的な文化」をもつ文明のヨーロッパは，暴力をどのように処理し平和的な時代を築いてきたのか。この問に対して山内進の議論にしたがって概略を整理しよう[32)]。

中世のヨーロッパは暴力が満ち溢れていた。フェーデ（私戦）は，正当な理由をもち，適正な手続きを踏むなら違法とは認識されなかった。そこには和解のチャンスや圧力が存在していたが，和解は当事者の決断，妥協，社会全体の雰囲気にゆだねられていた。当事者に対して屹立した公権力がなかったからである。ヨーロッパはその歴史のなかで暴力のあり方を大きく変え，「合理的，平和的」装いを示すことに成功した。その過程は３つの時期に区分される[33)]。

第一期は，聖俗分離，平和形成の試みの時期で，11世紀から15世紀末である。

第二期は，規律化と文明化の段階で16～18世紀末の時期にあたる。規律化：宗教改革と宗教戦争の時代を経て，ジャン・ボダンは宗教的寛容を主張するとともに，宗教の名による暴力を政治的騒乱とみなし，統治権力にその抑圧を要請した。王権という世俗的政治権力だけを唯一の公的な存在とみなし，宗教にも貴族権力にも公共性を認めなかったのである。当然フェーデも認められる余地はない。くわえて，新ストア主義は，激しやすく暴力的な中世的人間の内面を情念の支配から解き放ち，理性的計算と恒心，忍耐，服従へと振り分け規律化した。また，日常の行動も刹那的，情熱的なものから理性的，抑制的なものとする「文明化」した。一時の情念や怒り，名誉への執着は自滅を意味し，忍耐と計算，自己抑制が必要だからであった。

第三期はフランス革命（1789年）以降で，暴力の処理が国家と社会の二元化として完成していく時期である。規律化と文明化の進行のなかで，暴力は一般の人びとの間から消滅していった。その暴力は国家へと収斂し，暴力の合法的行使は国家だけが独占する。国家と社会の二元主義が成立する。国家が暴力を独占して安全を社会に保障し，市民は武器を持たず生活する。そうした市民の集まりが社会である。市民社会は，また経済社

32）山内進，2012年，『文明は暴力を超えられるか』筑摩書房
33）同上書，第四章

会で経済活動は純粋に平和なものとなる。

こうした過程を経てヨーロッパは強力な国民軍を持つ国家と，それに守られ経済生活や宗教生活を営む市民，社会とが成立したのである。近代国家はお互いに戦うと同時に，非西洋世界への侵略を本格化した[34]。

ところで，中世以降ヨーロッパは暴力をどのように正当化してきたのか。内山の整理によれば，聖戦論と正戦論がその役割を果たした。信仰の立場から異教徒との戦いや殺害と掠奪を肯定した議論が聖戦論である。正戦論は，宗教の相違を勘案せずに一定の要件を満たす暴力行使のみを正当とみなす。ヨーロッパや西洋は，境界の彼方と対峙し，これを攻撃し，征服し，支配したが，それは「聖戦論」「正戦論」とによって行われた[35]。「聖戦論」「正戦論」による戦いは境界の彼方に対するものであるが，ヨーロッパはいかなる境界を設定し対峙したのか考察が必要である。文明の西洋は境界の彼方の野蛮または未開の世界を抹殺するか支配しようとした。境界を明確に定め，彼方を攻撃し，撃滅または同化するか支配するという考えは，理論化され教養化され，思想にまで高められた。境界の思想は古代ギリシアにまでさかのぼる。古代ギリシアの境界のかなたにある人びと（バルバロイ）は，野蛮人で劣悪，奴隷にふさわしい存在であり，彼等にたいする暴力行為は家畜や動物と異なるものではない[36]。

近代の入口においてアメリカはヨーロッパの境界の彼方に存在する地であったが，ヨーロッパ人によるアメリカの開拓に伴って境界の内部に組み込まれることになった。ホッブスの『リバイアサン』はアメリカの自然状態の世界に対して自由に暴力を行使することができた。そこには，法のない世界とされたからである。ロック[37]においても，暴力によるアメリカの植民地化は正当であった。市民政府設立の論拠である自己所有権の論理，すなわち労働による所有権獲得の論理は，狩猟によって生計を立て土地に労働を投下しない先住民の所有者から排除する。所有者のない土地を占有し，囲い込み，労働によって自己のものとするのは自然法にかなった行為だった。それに対して先住民が反撃するなら，その反撃は違法である。彼らは暴力的な野蛮人にすぎない。これに反撃し彼らを殲滅するのは，したがって合法である。ロックにとってそれが，平和を侵すものに対する文明的反応であった。この論理が近代西洋の論理となった[38]。「法のない空間」アメリカは，冒険者や植民者にとって自由な掠奪の場となった[39]。こうして植民地

34）同上書，270ページ

35）同上書，12ページ

36）同上書，8～9ページ

37）John Locke, 1690, *Two Treaties of Government*,=鵜飼信成訳1967年『市民政府論』岩波書店（岩波文庫）

38）内山前掲書，275ページ

39）同上書，169ページ

化され，先住民から「合法的」に奪い取られたアメリカはやがてヨーロッパの内側に位置づけられることになる。植民した開拓者たちは，異教徒である先住民と戦い，征服し，消滅させるか同化して，ヨーロッパ的な国家アメリカ合衆国を作り出した。ヨーロッパと同質なヨーロッパ的アメリカ合衆国とからなる西洋が生まれた[40]。さらに遅れて参入した日本も文明化した西洋的な原理による近代国家建設に向かい，帝国主義国として仲間入りする努力を行った。

経済活動は暴力から隔離され市民の平和的な活動という位置を占めることになった。植民地における産業経済活動も同様に，平和的で暴力とは関係のないものになった。この論理はヨーロッパの近代資本主義システム（ヨーロッパ世界経済）が世界システムに拡大する重要なレトリックであったが，歴史はそう簡単ではなかった。かつて戦争は経済活動そのものであった。ヨーロッパにおける12世紀から19世紀の間，戦争は蓄積された富を使い尽くすとともに，他方では富の増加に寄与した。戦争は生産諸力を高め，技術向上させたからである。世界最強の「無敵艦隊」を打ち破り強国にのし上がっていったイギリスの原資の一部が海賊の獲得した富であったことは注目される。資本主義の到来以前，暴力は経済外的な役割を演じた。資本主義と世界市場の到来とともに暴力は，蓄積過程における経済的役割を演ずるようになったのである。長年戦争が繰り広げられた空間は，豊かで人が満ちた空間となり，資本主義のゆりかごになった。その結果として世界市場が形成され，ヨーロッパ諸国が大洋や大陸を征服し，略奪を行う。しかし，後に戦争は破壊と悪の原理に分類され，善と想像力の原理に対置された。戦争および軍隊が生産力として果たした役割りが無視されたのである。戦争は何を生産したのか？
西欧，つまり歴史・蓄積・投資の空間を生産したのであり，経済領域を支配的な地位に押し上げた帝国主義の土台そのものを生産したのである[41]。善と想像力の経済活動的暴力や戦争とは隔離された無関係な活動とみなされることになったのである。

近代的な植民地や西洋の境界の彼方にあるアジア諸地域において西洋はいかなる活動を展開したか。その車の両輪に相当する経済と暴力，そしてツーリズムのありように目を戻さなければならない。暴力から自由になった植民者たちは，経済活動に邁進することになる。それに抵抗する先住の人びとに対する暴力的な抑圧や殲滅に関してはすべて国家，現地に派遣された国民軍の責任であった。植民者たちはヨーロッパ的な空間を生産し，産業と生活を創出し，利潤を追求することに集中することになった。そうしたなかで生産されたレジャー空間や生活空間は西洋からのツーリストのデスティネーションになっていったのであった。

40）同上書，13ページ

41）Henri Lefebure, 1974, *Le Production de L'espace*, Paris, Anthropos,=斉藤日出治訳，2000年，『社会学の思想⑤　ルフェーブル　空間の生産』青木書店，399～401ページ

本章では，モダンツーリズムもしくは植民地ツーリズムにおける非西洋・東洋に向けられた西洋人ツーリストのまなざしの構造について考察してきた。合理的で平和なツーリストのまなざしはそのうちにあった暴力を外部化し，国家に一元化して自らはそれから自由になって一見平和的・非暴力的な経済活動やレジャー活動に専念し，享受することを可能にしたのであった。

4章　余暇空間としての植民地空間の生産

植民地やアジアに向かう西洋人たちのまなざしは，植民地空間あるいはアジアに建設した西洋人の都市や現地の風景に向けられたが，そのデスティネーションは余暇空間でもある。アジア各地にはどのような空間が形成され，どのように余暇空間としての機能を果たしたかについての考察への準備をするのが本章の課題となる。近代の西洋にとって余暇とは何か，余暇空間とはどのような機能を持つべきものかといった課題について検討する。とくにルフェーブルの空間論および余暇，享楽についての幾つかの理論に言及する。また本稿の研究に続く実証研究のアウトラインを提示する。

1．余暇空間としての植民地空間の生産

近代人にとっての余暇とは日常的な活動，すなわち日々の労働や生活を離れる活動である。

余暇には「享楽」の意味もある。ホルクハイマーとアドルノは，近代のレジャーや休暇，余暇が太古以来の祝祭が無毒化され，管理されたものであるという。享楽とは，自分を自然から守ってくれる安定した秩序を脱して自然に立ち戻りたいとする心情で，その秩序があって初めて生じるものである。近代人にとっては，労働の時間から，あるいは個人が特定の社会的機能や「自己」へ縛られている状態から脱して支配もなければ規律もない太古に帰ることを夢見るときに始めて「享楽」の魔力を感じる。享楽は，自然を忘れ社会や人工のものにばかり依拠して生きる人間に対する自然の恐るべき復讐なのである。日常を離れた享楽のうちでは，人間は思惟することを止めて文明から逃れ去る。太古の社会においてはこのような退行は，共同体的なものとして祭りのうちに用意されていた。祭りの期間は世界秩序が廃棄される瞬間のように見え，そこではどのような放埒も許される。人は規則に背いて振舞わねばならず，すべては逆転すべきである。あらゆる禁令が失効するため，この行為は奔放であり狂気の性格を帯びる。やがて，啓蒙と文明が進展するにつれて始めて強化された「自己」，安定化した支配は，祭りをたんなる茶番劇にするよう奔走する。支配者たちは，享楽を合理的なものとして導入する。同時に，享楽を自分にとって毒のないものにし，高次の文化のうちに保持しようとする。享楽をすっかり取り上げることができない場合は，被支配者たちにもその分け前を与え

ようとする。そのとき，享楽は操作の対象となり，ついにはさまざまな行事や催しのなかに埋没するにいたる。この発展過程は，原始の祭りに始まって現代の休暇にまで及んでいる。かつての共同体の祭りの狂騒の期間は個人個人に分解され，休暇に取って代わられたのである[42)]。余暇には脱現実，価値の逆転などへの指向があり，ツーリズムもまたその文脈にあり，植民地や東洋へのまなざしもその意味から自由ではない。

ルフェーブル[43)]によれば，余暇空間とは「性の代替がおこなわれる空間，自然が冷酷な抽象によって置き換えられる空間，自然が快楽の不在によって置き換えられる空間」である。この空間では，女性に代わって女性の映像が支配し，女性の身体が断片化され，欲望が打ち砕かれ，生活が粉みじんになる。女性の身体は，交換価値へと，商品の記号へと，そして商品それ自身へと変貌を遂げる。性と性行為が，快楽と生理的な満足とが一体化するのは，「余暇」を専門にする場における余暇活動においてである。休日のリゾート地しかり，農村しかり，雪原・太陽が輝く浜辺しかりである。これらの余暇空間には，性的な要素が加味される。2章でふれたが，ザイードがオリエントへのオリエンタリストの旅，巡礼の旅を考察するなかで述べた性的な経験は近代人の余暇体験とも重なり合っているわけである。

もう一点ルフェーブルのエネルギーと祭りに関する考察に耳を傾けてみよう[44)]。

ルフェーブルは，祭りが社会の安全弁というばかりでなく，生物としての人間的活動として本質的なものであるとして，身体とエネルギーとの関係から論じている。いかなる生物も熱を吸収し，呼吸し，食物を摂取する一方で，必要量を越えて利用可能なエネルギーの余剰分を確保し，貯蔵し，刺激や攻撃に備える。この余剰・過剰こそが生命とたんなる生存とを区別するところである。生命にとってのエネルギーの本質は，生産的に支出されることにある。その生産には遊びや無償の暴力性の生産も含まれる。その結果，被害や現実を生み出し，空間を形成し，新しい空間を生み出す。エネルギーの爆発的浪費である遊び・闘争・戦争・性は互いに不可分で，生産・破壊・再生産は互いに絡み合っている。浪費・遊び・闘争・芸術・祭りは「エロス」の必要性が効力を発するものなのだ。

ニーチェがいう存在のディオニソス的側面，すなわち過剰・陶酔・危険は固有の価値を持っており，生物の身体はその内部に遊び・暴力・祭り・愛の可能性を持っているのである。ニーチェは，存在の傾向をアポロン型とディオニソス型に区分している。すなわち，アポロン型は，調和・中庸を得た主知的傾向であり，ディオニソス型は奔放で劇場的，自制心を欠く傾向である。この両者は，暴力と安定性，過剰と均衡といった自己

42）ホルクハイマー・アドルノ，前掲書，157～159ページ
43）ルフェーブル，前掲書，447～449ページ
44）同上書，266～268ページ

の空間と他者の空間に跳ね返ってくる。

祭りや遊び，芸術などの本質は，生物の身体にとって余剰エネルギーの爆発的放出であり，ディオニソス型傾向による生産・破壊・再生産の契機なのである。遊び，余暇や享楽の本質的な存在理由はここにあるというわけである。

モダンツーリズムあるいは植民地ツーリズムにおける西洋人ツーリストのまなざしの基礎には，余暇や享楽の欲望があるのであろう。植民地や欧米人の手でアジア各地に建設された都市や地域には，植民者，現地居住欧米人および欧米からのツーリストの持つ余暇や享楽の欲望を満たす仕掛けが隠されていると考えられる。

われわれはこうした余暇空間を考慮に入れたアジア諸地域の空間に関する研究に進まなければならない。

2．実証研究のアウトライン

われわれの研究は，アジア諸地域におけるモダンツーリズムの形成に関わるものであり，これまで若干の考察を公にしてきた。次に述べるべき課題は，具体的，実証的研究である。そのアウトラインを示しておきたい。

ヨーロッパ世界経済のアジアへの拡大にともなって，アジア各地にレジャー・ツーリズム空間が生産され，ヨーロッパ的なツーリズムが移植されることになった。その過程には，欧米人植民者の移住，都市や産業建設，生活空間の生産があった。中でもレジャーやツーリズムのデスティネーションになった地域について着目する。植民地になった国，ならなかった国，植民者たちが集住した国に区分してそれらの比較研究を試みる。対象とするのは，ポルトガル・オランダさらにイギリスの植民地であった歴史をもつセイロンの首都コロンボとデスティネーション都市ヌアラエリア，日本の植民地となった台湾の台北および北投などの温泉地区，植民地支配を経験していない日本については外国人居留地の長崎および雲仙を取り上げることにする。もう一つ中国上海と幾つかのデスティネーション都市に注目する。上海は租界地に多くの欧米人が居住し，欧米風の街並みが建設された歴史をもっている。植民地都市，租界，居留地といったそれぞれの形式でアジア各地に移住し，産業を興し，生活する空間を生産した欧米人はレジャーやツーリズム空間をも生産することになったのであり，それがアジアへのモダンツーリズムの移植になった。レジャー・ツーリズム空間は，欧米人にとって安心・安全・快適なデスティネーションであり，保養所である。欧米の故郷に生活と現地の自然，文化の間に位置する両者の美しさ良さを兼ね備える表象の空間であった。ここで扱うそれぞれの都市とデスティネーションはそれぞれ特別な関係を持っていたのではないだろうか。

欧米人が居住し経済活動をおこなった都市の状況，その環境によってレジャー・ツーリズム空間の開発の仕方にも相違があると考えられる。セイロン，中国，日本そして台

湾がそれぞれ，どのようにヨーロッパ世界経済と接触したか，それぞれの都市はどのように欧米人を受け入れ彼らの経済活動を受容したか，そしてその結果どのような都市が建設されたについて記述することになる。そうした過程のなかで，レジャーや保養，余暇の空間としてどのような開発が行われたかについて述べる。

⑴ 植民地都市コロンボ（セイロン）

コロンボの中心エリアはフォート（砦），ペターと呼ばれ，イギリス植民地政府および欧米の企業や団体が活動する区域であり，その周辺には欧米人の居住区域，産業地域が連なり，その外側にシンハラ人の企業や居住地域が広がっていた。一部のシンハラ人は欧米人産業の周辺産業，例えば運輸産業や醸造業などを営む者もあり，インドからの移民と同様最下層のクーリーとして働く者もいた。その間に，世界各地から商業的な経済チャンスを求めて到来した商人たちが集住していた。コロンボに発展した産業は，セイロンの主力輸出品であるシナモン，コーヒー，茶，シンチョナなどに係わる製造業や梱包，流通に係わるセクターであった。コロンボは元来地元のシンハラ人が建設した都市というよりは，ポルトガルがシナモンのヨーロッパ市場への積出港としてフォートを建設したことに始まる。シナモン交易に魅力を感じたオランダさらにイギリスがフォートを充実させ，交易港として拡充してきた都市であった。コーヒーがセイロンの主力産品になると，標高の高いキャンディーを中心とした高原エリアがコーヒーの産地となり，コロンボとの間に鉄道建設がおこなわれ，島の主要な交通システムとなった。

⑵ 租界都市上海（中国）

19世紀まで清朝は禁海（鎖国）政策を継続しており，欧米との交流を拒否していた。これに対しヨーロッパ諸国は中国産の茶，陶器などの需要に応じて輸入したが，これに対する支払いを銀でおこなっており，ヨーロッパばかりでなく中南米産の銀が中国に大量に流入することになった。これに対抗するために，イギリスはインドで生産されたアヘンを中国に持ち込み，中国から茶や陶器を輸入し，インドへは機器製木綿製品を輸出するという三角貿易の仕組みをつくって実行した。大量のアヘン流入に悩まされた中国はこれの取締りを強化したが，アヘン戦争に発展し，清の海軍は惨敗した。この結果1843年上海などの港が開港されたのである。これを期に上海は近代的な貿易都市，国際都市，東洋のパリと謳われる華やかな都市に成長していくことになるが，それはイギリスを始め幾つかの欧米諸国との間で締結された租界に関する条約によるところが大きい。欧米諸国は，中国との関係を樹立して行政に係わる人材ばかりでなく商人やビジネスマンが上海に移住して，租界を治外法権地域として独自の都市開発を行った。旧来の上海在住者地域に挟まれるように租界が発展していった。中国国内における王朝末期の動乱の時期でもあり，租界を目指して多くの人びとが来滬し，租界も中国人地域も人口増は

めざましかった。租界では欧米型の近代的な都市をモデルとした開発が行われ，不動産業者がリードし，中国人居住のための住宅も大量に建設された。

租界は，共同租界とフランス租界に二分され，それぞれに行政部門が管理に当たった。フランス租界は黄浦江に沿って集中する代表的な企業や銀行，バンドから西に伸びて競馬場につながる大馬路，それと並行する二馬路，三馬路・・・，それぞれ特徴ある街路が形成されていた。淮海路はビジネスや行政街であった大馬路と並ぶ大きな街路であったが，高級住宅街であった。四馬路の競馬場に面した場所には教会が立地していた。馬路とは文字通り馬車道である。大馬路にはガス等が設置されたが，これはヨーロッパ本国で設置されてまもなくのことであった。

租界地は，上海城を中心としたそれまでの市域の北側に設置され，中国人街は南市と呼ばれ，中国独自の商業都市が営まれていた。他方租界の北側，蘇州河の北側は余り人が住むのには適さない湿地が広がっていたが，流入してくる中国人たちが住み着く「棚戸」とよばれるスラムが点在することになった。閘門の北側であったことから閘北（ザーペイ）と呼ばれる中国人居住エリアであった。そこには，蘇北人（スーペイレン）と呼ばれる江蘇省北部出身の戦火を逃れてきた貧しい人びとが居住し，旧来の上海人や商工業者が居住する南市とは異なる様相をみせていた。

上海で来滬した欧米人とともに産業を興し交易に携わった中国人の中心は，買弁（コンプラドール）であった。中国には古くからの独自の商習慣があり，外国人が直接商売に参入するにはさまざまな困難があった。中国，欧米両方の言葉や商習慣，ルールなどを了解した中国人を仲介者，代理人としてビジネスに当たることが得策であった。租界都市上海では買弁商人が活躍し，欧米人とともに産業を興し大きな経済力を手に入れていった。買弁が上海の中国人社会を代表する力をもつとともに，上海全体が買弁都市と呼ばれるような役割を持つに至った。買弁商人たちは租界内に居住する者，南市に居住する者もあった。外来者や買弁商人たちによって租界を中心として発展した産業は不動産業，貿易，流通産業からサービス業へと拡大していった。出版やホテルといった産業も発展し欧米人コミュニティーの生活も充実していった。社交，レジャーなどの欧米本国における生活やライフスタイルが導入され，市内での競馬，郊外でのハンティングやフィッシングばかりでなく山岳エリアや海浜エリアにおける療養やレジャー活動の開発も進んだ。こうした領域も欧米人と買弁の手で開かれていったのである。

⑶　外国人居留地，長崎

日本で最初に近代ツーリズムが成立したのは長崎であった。幕末に来崎した欧米人たちが長崎を本拠に経済活動をおこない，生活するコミュニティーを形成したのにともないツーリズムデスティネーションを開発し，レジャーやツーリズムを含むライフスタイルを日本に持ち込んだのである。長崎はそれ以前より海外との交易が認められた唯一の

港市であり来崎するオランダや中国の商人たちが活躍する街であった。しかしその頃の日本は中国世界経済の一部，すなわち中国の高い技術を持った絹織物を頂点とする経済システムの一部であった。ヨーロッパ世界経済のアジアへの拡大にともなって日本もまたその一部に編入されることになり，長崎はその最初の入り口となったのである。イギリス機器製木綿製品を戦略的産品として上海にまで拡大したヨーロッパ世界経済が，日本さらに朝鮮にまで拡大することになったのは「上海ネットワーク」と呼ばれるシステムによってであった。上海にやって来た大量の木綿製品は市場を形成し，その一部は中国人商人の手で日本へ輸出されたことに始まるネットワークによって巻き込まれていくのである。長崎では中国商人から日本人商人へ渡った木綿製品は，日本国内で販売されるとともに朝鮮行きの積荷ともなった。朝鮮では朝鮮人商人によって国内に販売された。こうした上海―長崎―朝鮮・釜山と広がる上海ネットワークによって日本および朝鮮は最辺境地域としてヨーロッパ世界経済に編入され，その世界経済分業の一翼を担うことになったのである。木綿製品の流れとは逆の流れとして，朝鮮から日本へは金や農産物が，長崎から上海へは茶や俵物と呼ばれる海産物が運ばれた。

上海ネットワークによって位置づけられ移動したのは商品ばかりでなく，中国商人とともに欧米人ビジネスマンたちであった。彼らの来崎は新たな現象であった。そのなかでもっとも有名な人物はトーマス・グラバーであった。彼らは居留地に居住し，欧米的なコミュニティーを形成した。彼らが関わった産業や都市の開発の日本側のパートナーは，上海における買弁とは一線を画す新興の商業，ビジネスの人びとであった。彼らは独自に茶産業，石炭業，ホテル業などを開発し，国際ビジネスに取り組んだのであり，やがて療養，レジャー，ツーリズム産業が長崎や雲仙に開かれる際にも欧米人とともに日本人や行政などが重要な役割を果たしたのであった。

⑷　日本の植民地台湾　台北

明治初期の日本の経済発展は目を見張るものがあった。産業革命も完成し，木綿産業は驚異的な成長を短期間で達成し，イギリスの生産量を追い越し世界一の紡績国に浮上し，さらに他の近代産業も発展し軍事力も強化されていった。「富国強兵」の国策が官民の努力によって達成されたのである。日清戦争の結果は日本の勝利に帰し下関条約によって台湾は，日本の植民地となった。こうして台湾は日本を通してヨーロッパ世界経済の最辺境地域として国際分業に組み込まれた。幕末の頃に辺境国として国際分業に編入された日本は，20数年間の時間を経て，工業発展を梃子に半辺境国へジャンプアップしたのである。その結果は，自らの辺境として台湾を植民地支配することになり，日本を中心とする国際分業へ編入したのである。

台北は，台湾北部に位置する淡江（淡水）の河岸に発展した内陸都市であり，清末期には台湾の中心として近代都市へ発展を開始していた。中国人の居住エリアに接してあ

るいは重なるように植民地都市は建設されていった。その中心部分には，台湾総督府や行政，文化などの機関が置かれ，多くの日本人が移住し日本的な都市建設が進んだ。植民地台湾の建設目的は，何よりも日本人や日本経済が必要とする産物を日本や外国へ送り出すことであった。台湾経営は，日本の国家事業として行われたものであり，総督府が設置され，その下に行政組織が確立し，日本国内に準ずる経済開発，社会建設がおこなわれた。台湾に与えられた役割分業は，自然資源の開発，農業産品の生産，日本への移出，輸出による外貨稼ぎ，在台湾日本社会の確立などであった。また，日本製工業製品の消費地としても期待された。イギリス植民地であったセイロンと比べれば，台湾は日本とは距離的に近く，経済分業というばかりでなく第二の国土として台湾住民の日本人化，日本社会の建設が進められ台湾全体の日本化が目指された。

台北の中国人居住エリアとの接点には繁華街である西町が置かれ，日台の交流，接合の空間となった。また，鉄道による島内の流通は，台湾産品の集荷・積み出しと日本人居住者の生活資料流通を旨とするシステムとして形成された。こうした空間が台湾におけるレジャー・ツーリズム空間になっていく。ツーリズムデスティネーションは温泉を中心とした開発であった。三大温泉と呼ばれた北投・関子嶺・四重溪の温泉地には，日本的な温泉歓楽街が形成されたが，日本軍の療養所もその開発に大きくかかわっていた。1904年開戦の日露戦争で負傷した兵士たちを療養させる温泉療養所として台湾の温泉が活用されたのである。国・軍と民間が共同して繁華な歓楽街が形成されたのであった。

本研究は，モダンツーリズム・植民地ツーリズムおける，アジア諸地域に向かうヨーロッパ人ツーリストのまなざしの在り方について整理するとともに，そのデスティネーション空間の新たな生産にかかわる具体的な実証研究を準備をすることであった。各地における植民地都市空間およびデスティネーションに関する記述が今後の課題である。